原子爆弾に関する２つの考察
―ヤスパースとアーレントを手掛かりにして―

平　野　明　彦[*1]

Two Considerations of Atomic Bombs
― Centering around Jaspers and Arendt ―

Akihiko HIRANO[*1]

Karl Jaspers and Hannah Arendt were distinguished contemporary philosophers of the 20th century who commented occasionally upon a modern technology, atomic energy and atomic bombs.

In this paper, first, I attempt to summarize the character of considerations of technology and atomic energy by them. Secondly, I will clarify some radical problems of atomic bombs centering around arguments by Jaspers and Arendt. Finally, comparing and contrasting two arguments about atomic bombs, I will explain the essential significance of their considerations.

はじめに

周知のように、3.11の東日本大震災とその後福島を襲った原子力発電の事故以来、世界中で原子力をめぐる数々の議論が喚起されている。とりわけわが国において、20世紀ドイツの哲学者ハイデガー（Heidegger M.）の技術論と原子力をめぐる洞察がこれまでしばしば取り上げられてきた[1)]。他方、もう一人のドイツの哲学者ヤスパース（Jaspers K.）に関しては、いまだ衆目の見るところとなっていない[2)]。

こうした事情の下、2022年２月にロシアによるウクライナ侵攻が開始され、ヨーロッパを中心に俄かに核爆弾使用への懸念が高まりつつある。そこで本稿において、原子力と原子爆弾の問題点をできる限り詳細に検討する。その際、原子力以上に原子爆弾の脅威と重大性を訴えていたヤスパースに加えてアーレント（Arendt H.）のコメントに注目し、二人の主張を比較検討する。というのも、ウクライナにおける戦闘のアクチュアリティに鑑みると、原子爆弾に関するアーレントの考察を無視することはできないと思われるからである。また、原子爆弾に関するヤスパースの独自の見解の真意と問題点を明らかにするために、二人の同時代の代表的思想家の一人アンダース（Anders G.）のヤスパース批判にも言及する。さらに、ヤスパースのみならずアーレントの思想のもつ現代的な意義に新たな光を当てたい。

それに先立って、主に2021年12月に日本ヤスパース協会の（オンライン）大会で行われた講演原稿の一部を手掛かりに、科学技術と原子力に対するヤスパースとアーレントの見解を要約する[3)]。

＊1　日本大学国際関係学部国際教養学科　教授　Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

1．＜技術＞と＜原子力＞に関する２人のコメントの基本的性格

（1）ヤスパースの主張の特徴

はじめに、ヤスパースの科学技術と原子力について一瞥する。すでに『現代の精神的状況』（1932）でヤスパースは、現代の科学技術の特徴として、地球自体を「その資源とエネルギーを利用しつくすための唯一の工場に変えてしまう」[4)]という点を挙げている。たしかにヤスパースが、科学技術自体はむしろ中立的な手段に過ぎないという認識をもっていたことは否定できないものの[5)]、やはりそれが人間の生活を変質させてしまう危険を孕んでいる魔法の杖のようなもの、という洞察を持っていたことも事実である。

さらに、こうした技術の本質が「力」として捉えられ、新たな力と認識の拡大を求める技術自体のもつ、ある種魔的な性格が指摘される。ヤスパースはそれを「技術の魔性（Dämonie）」[6)]と呼ぶ。換言すると彼は、技術の断絶という現実を見据え、しかも悲観論と楽観論という両極の緊張関係を保ちつつ、＜技術の制御＞可能性を模索しようとしている、と言えよう。

ヤスパースはまた、こうした科学技術のもたらす帰結として原子力を捉える。すなわち『歴史の起源と目標』の中で、本質的に新しいものとして原子力の発見が取り上げられ、その計り知れない可能性と同時にその危機的性格が暴露されている[7)]。さらに『原子爆弾と人間の未来』（1958）においても、科学技術同様、原子力をも含めた技術の進歩自体について相反する２つの見解（世界観）が提示され、楽観論と悲観論という両極の緊張関係が示唆されるのである[8)]。

（2）アーレントの基本的見解

次に、アーレントに言及する。『人間の条件』（『活動的生』）（1958年）の序でアーレントは、人工衛星の打ち上げと人工授精による種の「改良」を取り上げる。ただし彼女が最も注目している技術は、意外なことにこの２つではなく、オートメーションである。人類の月への到達やクローン人間の製造に比較すると、それはさほど驚くべき事態ではないように思われる。ところが本文で、「オートメーション」が「技術の発展の最終段階」と位置づけられ[9)]、その意義が次のように際立たせられるのである。そこでは、もはや職人の目的の遂行の手段として技術が用いられるのではない。いわば技術が独り歩きをし、制作者の意図と無関係に製品に関与する。現代では、製造物が職人の手も消費者の手をも離れて、電動機械の規格性や効率性にしたがって動き続けるのであり、かつて自然の暴力から人間を守ってきた技術が現代の都市に制御不能な新たな怪物を出現させる、という訳である[10)]。

科学技術に関する上記の考察は、オートメーションが普及した今日の社会から見ると、一見陳腐な様相すら呈している。しかしながら、今後起こるであろうAIや仮想空間の暴走の可能性を考慮するならば、むしろ先見の明があると言えるのではないだろうか。

さらに『活動的生』（『人間の条件』）の中で、アーレントは、これまでの技術にはない原子力の新たな特性について注目すべき考察を加えている。ここで彼女は、原子力を取り扱う技術によって「宇宙にしか生じていないエネルギーや力を、この地上で、かつ日々の人間的生活のなかで操作すること」で、「宇宙に偏在している宇宙力を、地上の自然に導き入れる」ことになるのだ、と主張する[11)]。それは、もともと地球上にはなかった全く異質なものが世界へと侵入し、世界に、これまでにはない或る新たな危険が付け加えられるという事態を意味する。

以上のような指摘は、ヤスパースが述べていた「技術の魔性」にも通じるものであるが、ここで彼女が人間的世界への宇宙的異物の侵入と表現していることは、やはり無視できない。しかしながらヤスパースもまた、ほぼ同時期に、原子力について次のように述べているのである。「人間が宇宙エネルギーのもろもろを、太陽物質そのものの力を、今日まで休止している地球物質から解放することによって、われわれの地球に移すということが、何と言ってももうすでに法外なことなのだ」と[12)]。

２．原子爆弾に対するヤスパースのコメントについて

これまで、技術と原子力に関する２人の見解を簡単に確認したのであるが、次に『原子爆弾と人間の未来』において主題化された＜原子爆弾＞に関するヤスパースの主張を検討する。

1958年に出版されたこの本は、原文で500ページ余りの大著であり、原子爆弾に対するヤスパースの基本的態度を理解するために欠くことのできないものである。ところが、本書を一瞥すると、原子爆弾へのコメントが余りに少ないという印象を拭えない。たしかに本書には「現代における政治意識」という副題が付けられており、ある意味政治が主題化されているとしてもさほど不思議ではない。しかしながら、こうした印象も影響してか、これまで本書に対して様々な批判が提起されてきた。なかでもヤスパース同様、原子力と原子爆弾の特別な意味に着目するアンダースの批判はやはり無視できないだろう。

（１）「自己変革」という訴えかけをめぐって

そこで、彼の批判とその妥当性について検討する前に、まず、この本の中でヤスパースがどのような主張を展開しているのかを要約する。『原子爆弾と人間の未来』の主題は、言うまでもなく1950年代における原子爆弾をめぐる世界の情勢とその危険性をレポートすることであり、人類が原爆による絶滅の脅威にどのように取り組みうるのかを検討することにある。それは、概ね次のようなものである。

第一に、原子爆弾は人間によって製造されたものであり、それゆえ製造のみならずその使用も、さらにその究極の可能性としての人類絶滅の危機もまた人間によって引き起こされる何ものか、ということになる。そしてその限りにおいて、当然それを、これまで駆け足で追ってきた科学技術や原子力の延長線上に位置づけることもできるだろう。しかしながらヤスパースは、原子爆弾とその使用による核の全面戦争ならびに人類滅亡の脅威を前者２つの暴走の脅威と明らかに区別する。それは、科学者や軍人や一部の専門家に一任されるべきものではないし、しかしまた官僚や政治家たちにのみ委ねられるべきものでもない。そうではなく、原子爆弾や核戦争の問題を考える場合には、市民一人ひとりの考えと決断が不可欠となる。換言すると、「決定する位置に立っているのは、いつの場合でも一人ひとりの人たちなの」[13]だ。以上のように、本書において原爆による人類滅亡の可能性とともに、それを阻止するわれわれ一人ひとりの、ある種の＜内的変革＞とも言うべき決断の重要性が強調される。そしてまさしくこの点に向けて、アンダースは批判の矢を放つ。少し長くなるが、彼の批判を引用する。

> ヤスパースが忠告していることはほとんどすべてが自己変革（Selbstveränderung）なのです。――中略――しかし言うまでもないことですが、自己変革という際に変革を試みる人が単純な意味でさらなる歩み、行動へ歩みを進めることを当然の前提とせずに自己変革を説こうとは、全く思いもよらないことでした。――中略――しかし「計画」に対する不安のあまりヤスパースは、かれがもっぱらそれだけを考えている完全に行政的な意味での計画とは無関係な行為、特に対抗的な行動があることを忘れています。全世界的なプロテスト、核兵器製造やミサイル基地建設への協力の拒否その他を促そうという考え――要するに、現実の反対運動を促進あるいは要求し、無数の人々がそれを引き受ければ世界の状況を一変させ得る連帯行動には考えが及んでいないのです[14]。

以上のようにアンダースは、そもそもヤスパースが核兵器製造や使用の反対といった具体的な抗議行動へと人々を誘うことがないことに疑問を呈する。さらに、それに代わる訴えが各人の＜自己変革＞という内省的・哲学的なテーゼに終始していることに苛立ちすら覚えているように見える。絶滅戦争の危機が迫っており、しかもそのことを自覚している著名な哲学者がストア学徒のように冷静に世界を分析し、具体策をほとんど示すことなく各人の良心に訴えかけようとする姿勢には、到底理解も共感も抱くことなどできない、と言わ

んばかりである。

たしかに、ヤスパースの主張が具体性を欠くという批判には一理あるものの、しかし、やはりアンダースはヤスパースの真意を掴み損ねていると言わざるを得ない。というのも、かつてアインシュタインが提唱し、オットー・ハーンに引き継がれた反核運動や平和運動が部分的な成果を収めたことに一定の評価を与えてはいるものの、それ以上にヤスパースは、こうしたある種セクト的な一過性の運動（連帯行動）の限界を痛感していたのであり、むしろそうした行動の狭さや閉鎖性や水平化を乗り越えることに注力していたからである[15]。そこで次に、このことを明らかにするために、引き続き、一人ひとりの個人にのみ内在するヤスパース的な「理性」の意義について確認したい。

ヤスパースの理性が通常の近代的なそれと異なることは、例えば次の定義からだけでも明らかであろう。彼は、理性（Vernunft）を近代的な合理性や認識能力や思考力（推理）等と明確に区別し、それを自分と近しい意見や主張だけでなく、「存在し、なおかつ存在しうるすべてを制限することなく聴き取ること（Vernehmen）」[16]と定義しているからである。したがって、その最大の特徴は人間同士の「交わり」（Kommunikation）にあるが、しかし、ただのコミュニケーション（伝達）ではない。それは、自分にとって遠く異質な意見に耳を傾けつつ、互いに相手の人格を尊重し、なおかつ忌憚のない意見をぶつけ合うような関係を意味する。ヤスパースの用語では、「単なる悟性と悟性の交わりや精神と精神の交わりではなく実存からと実存へと至ろうとする交わり」[17]のうちで、理性はその本来の役割を果たすことができるのである。

では、その本来の役割とは何か。まさしくそれこそ、アンダースが不満を抱いた各人の内的・精神的な＜自己変革＞に他ならない。換言するとヤスパースの意図とは、「単なる＜悟性の思考＞から包括的な＜理性の思考＞への」、「新しい思考方式」を模索することであり、いわば心の内奥における哲学的な「転回」（Umwendung）[18]を示唆することである。換言するとそれは、一人ひとりができる限り集団や個人の利害から離れ、まずは原爆のもつ深刻さと向き合うことを促すことなのである。もちろん、こうしたヤスパースの訴えに対して、なおも次のような批判が想定されうる。「ヤスパースは「世界の教師（Magister Mundi）」のパトスを中立主義（Neutralismus）と結びつけている」が、彼は「19世紀のアカデミックな哲学の、政治参加の拒否や閉塞状態を打ち破って」はいない[19]。やはり有効なのは、観照的な思考（内省）ではなく現実の行動であり、行動への直接的なアピールなのだ、と。反核運動の有効性に鑑みると、一見こうした批判は当然のことのように響く。しかしながら、ヤスパースが核戦争の問題に対峙することの困難さをアンダース以上に深刻に捉えていたことが忘れられてはならないだろう。というのも、彼は、この問題の解決のためには「全歴史の転回点が生ずるほどに人間自身がみずからの人倫的・理性的・政治的現象において変化する」必要がある、と考えていたからである[20]。

（2）「全体主義支配か原爆か」という二者択一をめぐって

次に、おそらく最も重要と思われるアンダースの批判を取り上げる。それは、ヤスパースによって定式化された＜全体主義支配か原爆か＞という二者択一への批判である。すなわち「人類の将来にとって他のすべてのものよりも脅威的である」原爆に匹敵するものとして挙げられるのは、「自由と人間の尊厳を抹殺する恐怖政治的構造をもつ全体主義的支配の危険」しかない。「前者では生存が、後者では生きるに値する生存が、失われてしまったのだ」[21]。

ここで、再びアンダースの批判を引用する。アンダースは、「ヤスパースが提示しているこの二者択一は、全く論ずるに値しない」と前置きし、次のように言う。「すなわちひとりの哲学者が、他の事実と同様に変動する（ロシアという国があるという）歴史的事実による危険と、修復不可能で取り返しのつかない人類の終焉を意味する危険を一緒に挙げていること」「を、驚くとともに深く恥じ入りながら取り上げる」、と[22]。さらに、次のような主張を展開する。

ヤスパースが著書の核心としている二者択一は、わたしたちの手元から消え失せています。「全体主義的」という不確かな言葉を使わざるを得なければ、核の状況そのものがすでに全体主義的だと言って間違いないでしょう。そして全体主義的な手段、すなわち人類の存在も人間の本質も破壊する核戦争による脅威を、（せいぜい人間の本質を一時的に脅かしているものの、人類の存在を脅かすものではない）ソヴィエトロシアという脅威に対する手段として投入しようとする考え方は、全く不徹底なものです[23]。

つまりアンダースによると、第一に、ヤスパースが人類の絶滅という究極の事態とソヴィエトロシアという歴史的な一国家による「全体主義的」支配とを同列に論じていること自体、全くの誤りと言わなければならない。というのも、人類の絶滅という無限大の脅威を一国家による自由の抹殺と比較することなど到底考えられないからである。核爆弾と核戦争のもつ特別な意味をヤスパース以上に強調していたアンダースにとって[24]、このことは看過できないことであった。第二に、そもそも「全体主義的」という言葉があいまいであることに加えて、「全体主義的」であるのはソヴィエトだけではなく、人類を絶滅させるほどの核兵器を所有しているアメリカも本質的に大差ない、という主張である。絶滅兵器たる核爆弾の所有自体が国家（社会）を全体主義的にする、という訳である。アンダースにとって1950年代のアメリカは、全体主義国家ソヴィエトと峻別される民主主義国家の典型ではなく、むしろマッカーシズムの吹き荒れる、排他的で「全体主義的な」社会を象徴するものであった[25]。

まず、第二の批判に言及する。当時のアメリカとソヴィエトを同等とみなすことには首肯しがたいものの、大量の核兵器の製造と使用のリアリティが多くの国民から自由な思考と発言の機会を奪うことは否定できない。のみならずまた、社会全体が硬直化し、多様な価値や視点を締め出す可能性すら想定されうる。実際当時のアメリカで、日本のような大規模な反核・平和運動が起きなかったことは偶然ではない。それゆえアンダースのこの指摘も、必ずしも的外れとは言えないだろう。

次に、第一の批判について検討する。それは他でもない、ヤスパースによって定式化された例の究極の二者択一が全く妥当性を欠く理念であり、何を訴えたいのかも不明と言わざるを得ないという非難である。たしかに、人類の滅亡とソヴィエトによる専制支配は同列には扱えないばかりか、そもそもソヴィエトだけにその実効性を想定することに無理があるという指摘は、傾聴に値する。さらに、この対置が原子爆弾の途方もない威力と壊滅的な惨劇を矮小化してしまう可能性も否定できない。この理念によって問題の本質が歪められてしまうという訳である。こうした批判に応えるため、次に、この定式化でヤスパースが本当には何を意図していたのかを明らかにしたい。

そもそも、なぜヤスパースは例の二者択一に固執したのだろうか。かりに核戦争による人類滅亡の危機だけに焦点が当てられていたならば、おそらくこれほど辛辣な批判は引き起こされなかっただろう。実際、「限界状況」（Grenzsituation）における個人の「死」と「人類の滅亡」という人類全体の＜限界理念＞は無関係ではない。例えば前期の主著『哲学』でも後期の『哲学入門』でも、限界状況が人間としての人間（実存）の生成にとって重要な契機となりうることが論じられている。通常われわれは「自分の生活の利害に駆られて、この世界のなかで計画と行動をつうじて対処したりするのである」が、「限界状況に対処するのは次のいずれかによってである」。すなわち、「この限界状況を覆い隠すことによってである」か、あるいは「限界状況を把握し」「絶望し再起することによってである。そしてこの後者の場合にわれわれは、おのれの存在意識を変革しつつおのれ自身となる」[26]。

以上のように、ヤスパースは一貫して「限界状況」の意義を説き、それがその都度各人の「存在意識」を根底から変えるきっかけとなりうること、そしてそのためにはどんなに救いのない状況であろうとも、まずはそうした現実と正面から対

峙しなければならない、と主張する。つまり、もともとヤスパースにとって重要なのは、ただ各人が生物としての「死」をいかに回避し、現実的な解決方法（延命措置等）を探るかではなく、むしろ誰しも免れ得ない「死」とどのように向き合うか、なのである。そしてそれゆえに、死に対する不安が「生命的な非現存在に対する不安」と「実存的な非存在の不安」の二重の形態において考察されているのである。換言すると、生物としての死に直面した人間にとって「真の不安はただ一つだけであ」り、「実存的な不安を充たす確信だけが、現存在の不安を相対化することができる」[27]。自らの死を克服不可能な限界として意識することによって、かえって自己の実存としての存在が強く意識される、という訳である。

したがって、こうした個人の限界状況同様、例の人類の＜限界理念＞においてもまた、重要なのはただ単に経済的・政治的・軍事的に＜人類の滅亡＞を回避する策を練ることではない[28]。より大切なのは、各人が一人の（可能的）実存として、そうした究極の状況から目を背けることなく、しかもただ人類の延命措置を図るのでもなく、真に人間らしい生き方とその実現に向けて人間自体の在り方を根底から考え直すことである。したがって、前期の『哲学』以来、生物としての個人的＜死＞や＜消滅＞が問題とされる場合に、常に同時に＜実存としての生＞や＜本来的実存＞の意味が問われていたように、＜人類の滅亡＞が想定される際にも、同時に＜生きるに値する生＞や＜自由と人間の尊厳＞の意味が対置されるとしても、何ら不思議ではない。

さらにここで、＜個人の死＞という限界状況が＜人類の滅亡＞という限界状況へと拡大された、と考えることもできるだろう[29]。そしてこの拡張は、当然前期の実存の成立条件が後期の政治的な自由（や人間の尊厳）の成立条件へと発展したこととも無関係ではない。ここでは、ザラムンの簡潔な解釈を挙げておく。「ヤスパースが交わりのパートナー同士での＜開顕性＞、＜同等性＞並びに＜実存的な共同性＞ということで理解していたものは、公的で政治的な領域へと転用され、次のようなアピールとして定式化されることになるだろう。すなわち、すべての人間と民族が自由に意見を表明する権利を支持すること」、さらに「他の人間や民族を、できる限り偏見や先入見を持たずに真摯に受け止め尊重することであり、彼らの民族的・言語的・文化的な他者性を無条件に尊重することである」[30]。

したがって、敢えてヤスパースが例の二者択一に拘ったのは、＜奴隷よりはむしろ死を＞というような、単なる外的・政治的なスローガンを掲げるためなどではなく、＜人類の絶滅＞という限界状況に直面した個人に根本的な変革を促すことを目的とする、彼固有の世界観や哲学的信念とその展開の故なのである[31]。実際ここで忘れてならないのは、アンダースが指摘するように、そもそもヤスパースが「全体主義的」支配の脅威を実在するソヴィエトロシアのみに限定していない、という点である[32]。たしかに、当時直接念頭に置いていたのはロシアであるとしても、本来的かつ潜在的には、全体主義支配による自由と人間の尊厳の抹殺の可能性はおよそすべての社会（国家）にも想定されうる。それゆえ＜人類絶滅か全体主義支配か＞という二者択一は、より正確には、＜人類絶滅という事態をいかに真摯に受け止め、自身の生き方全般を見直すのか＞という問題だったのであり、それに伴い＜全体主義支配による自由と人間の尊厳の抹殺＞という理念が提起されたのである。

以上のように、技術や原子力の問題と同様ここでも、ある種の＜限界状況＞に直面した人間の＜両極の緊張＞が強調されているのであり、当然そうした究極の選択にただ一つの正解などない。したがって、＜人類絶滅＞という限界状況から目を背けることなく、同時に＜生きるに値する生＞をどこまでも模索し続けることへと、つまり「＜本来的に人間になる＞という永遠の課題」[33]へと個人を誘うことこそ、ヤスパースの意図することだったのである。

３．原子爆弾に関するアーレントの見解

（１）全体主義支配と原子爆弾による自由と生命への脅威

最後に、アーレントに言及する。ヤスパースにとって重要なのは、原子力の平和的利用の危険性ではなく、原水爆による核戦争の脅威であった。たしかに2022年のウクライナ侵攻以前の世界では、核戦争による人類絶滅の危機よりも、原子力発電の事故による生物全般への脅威の方がより現実的な課題であったように思われる。ところが、ロシアによるウクライナ侵攻以降、状況は一変したといっても過言ではない。今や、核戦争の危機が全くの絵空事とは言い難い、切実な問題として急浮上したからである。一方1950年代において、ヤスパースが原水爆による全面核戦争こそ解決が急がれる最重要課題と見做したこと自体は、それ程驚くべきことではない。しかし他方で、＜全面核戦争による人類の絶滅＞というテーゼにはやはりリアリティが欠けているのではないか、という疑問が提起されうるように思われる。

アーレントにとっても、原子力はこれまでの技術にはない危険性を孕むものだった。しかしヤスパースやアンダースのように、彼女は原子爆弾と科学技術や原子力の問題とを峻別し、原子爆弾に特別の意味を持たせてはいない。彼ら二人の主張によると、近現代の技術は、われわれ人類に無限の可能性を供するとともに、原子爆弾の製造と使用へと到達したために人類絶滅の危機すらも招いているのであるが、必ずしもアーレントはこうした見解に与しない。

死後ジェローム・コーンによって編集された『政治の約束』等の論考の中で、たしかに原子爆弾が全体主義との関連において「絶滅戦争の恐怖」として扱われている。つまり、全体主義国家が通常兵器とは異なる原子爆弾という、怪物のような破壊手段を手に入れたことによって、もはや「問題になるのは自由だけではな」い。理論的には「生命自体も、人類とおそらく地球上の全生物の持続的生存もまた、問題になっ」たという訳である[34]。しかしやはりアーレントは、この問題をヤスパースのように＜全体主義支配か人類の滅亡か＞という究極の二者択一と捉えてはいない。むしろ原子爆弾と核戦争の問題を、全体主義支配の延長線上に位置づける。したがって両者をめぐる問題は、＜自由の終焉か生命の終焉か＞ではなく、＜自由と生命の両方の終焉＞という問いとして出現する。さらに、原水爆による「絶滅戦争は全体主義システムに適合する唯一の戦争なのである」[35]という発言に続き、全体主義の絶滅戦争によって滅びるものについて、『政治の約束』の中で次のような注目すべき主張を展開している。

> 第一に、もはや殺戮は、どうせ死なねばならない人間の犠牲者がより多かろうがより少なかろうが問題とはせず、不滅の可能性を持っている民族全体とその政治体制――中略――を標的にするということ。第一の事柄に密接に関係しているのだが、第二に、ここでは暴力は制作された事物――中略――にだけ向けられるのではなく、この制作物から成る世界に居場所が与えられている歴史的・政治的現実にも、言い換えるなら、それ自身が制作物ではないがゆえに再建されえない現実にも、向けられるのである。ある国民＝民族（people）が政治的自由を失うとき、それは政治的リアリティをも失う。――中略――この場合、滅びるものは何かと言えば、制作によって生まれる世界ではなく、人間同士の関係性から創られる活動（action）と言論（speech）の世界なのである。――中略――それ（全体主義的支配）は国内で個人を威嚇するだけでは満足せず、すべての人と人の間の関係性を破壊するために組織的なテロを行うのだ。このテロに相当するものは全面戦争においても見られる。それは戦略的に重要な軍事的ターゲットを破壊するだけでは満足せず、人類の間に生起してきた世界全体の破壊 ―そうした破壊を追求することが、いまやテクノロジー的に可能となっている― に取りかかるのだ[36]。

アーレントによれば、全体主義支配も通常の暴力的な破壊兵器も、人間によって制作された都市

や建物や道具ならびに人間の生命や生活だけでなく、われわれが生きている世界のリアリティや自由な活動（言論やパフォーマンス）そのものを破壊する。少なくとも、原子爆弾が製造され使用されるまでは、ナチスによるユダヤ民族のジェノサイド等の一部の例外を除き、民族や国民全体が殲滅される可能性は、さほど高くはなかった。ところが、第２次大戦中にアメリカによって初めて製造（かつ使用）された原子爆弾を全体主義国家が所有したことで、今やこうした最悪の事態が現実に起こりうる、と考えざるを得ない。したがって、彼女にとって本質的に重要なのは、原子爆弾によってどれ程の建造物やインフラが破壊され、どれ程の人間が殺されるのかという問題ではない。それは、原爆によって、言論を中心とした人間の自由で公的な活動やパフォーマンスの機会が奪われ、そうしたものを成立させる基盤だけでなく、文化的・歴史的な伝承や制度や法さえもが失われる危険性に他ならない。そしてその限りにおいて、アーレントの原子爆弾への脅威は、基本的に全体主義の脅威と切っても切り離せないもの、と言えるだろう。というのもヤスパースも述べていたように、そもそも全体主義支配には、人間にとって欠くことのできない言論の＜自由＞や＜生きるに値する人間の生＞を根底から破壊するという脅威が内在していたのであるが、そこに原水爆という圧倒的な破壊兵器が加わったことで、そうした自由や人間の尊厳の抹殺だけではなく、人間の生命自体の消滅の脅威が現実味を帯びることになったからである。

ただし、原水爆による人間の生命の消滅がヤスパースやアンダースの言うように人類全体の絶滅へと至る可能性に関して、アーレントは二人と足並みを揃えてはいない。たしかに先に引用した文章の中に、「それは戦略的に重要な軍事的ターゲットを破壊するだけでは満足せず、人類の間に生起してきた世界全体の破壊――中略――に取りかかる」という表現が見出される。しかしここで破壊される「世界全体」とは文字通り全世界・全人類ではなく、或る「国民＝民族（people）」とその「政治的自由」を指す、と解釈すべきだろう。それゆえ、彼女の本来的な問題関心が＜人類の絶滅＞にではなく、むしろ伝統や言語や文化を共有する一つの国民や民族が丸ごと世界から消えてしまうという意味での＜民族の抹殺＞にあることは、論を俟たない。

（２）政治的自由と複数性をめぐって

前述したように、アーレントにとって原子力と原子爆弾の脅威とは、基本的に全人類の絶滅ではなく一国家や一民族自体の殲滅の可能性を示唆するものであった。しかもそれは、民族的・文化的伝統や慣習や制度を徹底的に解体し、＜政治的自由＞を根底から簒奪する危険性をも秘めていた。ただし、ここで消滅が危惧されている＜政治的自由＞は、むろん通常の＜自由＞と同一ではない。そこで次に、そもそも彼女の言う＜政治的自由＞が一体何を意味するのか、を明らかにしておきたい。

『人間の条件』（『活動的生』）でも、「労働」や「仕事（制作）」と明確に区別される「活動」（action）の領域における「自由」の意義が強調されていたのであるが、ここでは、引き続き『政治の約束』を参照する。通常、政治的自由という言葉から連想するものとして、奴隷的支配からの自由や言論・出版の自由、さらに思想・良心の自由、あるいはロック（Locke J.）以来の信仰・私有財産の自由が挙げられるだろう。先に引用したように、一見してアーレントの政治的自由は、こうした様々な自由の中の言論の自由と類似している。自由が行使されるためには、第一に各人が支配―被支配関係から解放され、誰もが対等な立場にあるものとして自由に発言できる機会が保証されていなければならない。「なぜなら語り合う自由は他者たちとの相互作用において初めて可能になるものだからだ」。しかも「言論の自由は多くの異なった形と多くの意味を伴って現れるのが常であ」るが、とはいうものの「人は言いたいことを何でも言ってよいということではない」。「むしろポイントは、誰も、独りでは、客観的世界の全貌を十分には把握できないことを、私たちが経験から認識しているということである」。換言すると「世界は多くの人間に共有されて彼らの間に横たわり、彼らを離反させたり結びつけたりするも

のであり、それぞれの人に異なって現れるものだから、それが理解可能になるのは、多くの人々がそれについて語り合い、互いの意見と立場を比較しながら交換することができる場合に限られる」。それゆえアーレントによると、「リアルな世界に生きることとそれについてお互いに語り合うことは基本的に同一の事柄である」ということになる[37]。したがって、そもそも人間が現実の世界に触れるためには複数の視点を必要とするのであり、人間と視点の複数性（plurality）なしにはそもそも自由の前提自体が成立し得ないのである。

以上のような「意見とその表現の自由」が人間と社会にとってどれ程「決定的なもの」だとしても、「それは新たな始まりを行う活動の能力に固有な自由とは異なっている」[38]。それは自由な「活動」を通して人間が新しい「何かを始めること」であり、アーレントは、その核心をカント（Kant I.）の「政治哲学」と「自発性（spontaneity）の概念」に据え、皮肉なことにこうした自由の本来的意義が見直されることになったのは、現代における全体主義のおかげだ、と言う。つまり、ヒットラーやスターリンに代表される「全体主義体制が意見の自由を抹殺するだけでは飽き足らず、あらゆる領域で人間の自発性を原理的に破壊しようとしたから」なのだ[39]、と。さらに、全体主義体制だけでなく、そもそも近代資本主義社会が抹殺しようとしてきたのがこうした自由と自発性であり、その結果近現代において、本来的な意味での自由と活動の自発性は政治からほとんど締め出されてしまった、と主張する。というのも、資本主義社会において政治が「生命＝生活（ライフ）維持のための社会の資源とそのオープンで自由な発展のための生産性を保護するための手段だと見なされてきた」[40]からであり、全体主義体制においても、個人の自由を犠牲にして社会資源や生産性を保護し、社会秩序や安全を維持しようという目的が第一に掲げられてきたからである。

しかも、それだけではない。アーレントによると、自由な活動と自発性のないところでは、人は常に何らかの目的に奉仕しなければならず、必然的にある種の＜目的・手段関係＞に巻き込まれざるを得ない。さらにそうした関係は、およそすべての人間的な営みを単なる手段へと還元し、そうした行為の主体である人間自身をも単なる手段や道具へと変質させざるを得ない[41]。そしてまさしく、政治の存在意義をこうした「基本的な生命＝生活（ライフ）の可能性」と「人類の生存を維持するための必要悪」へと収斂させることこそが、今日の全体主義と原子爆弾がわれわれに突きつけるアポリアなのであり、そうした「二重の脅威――中略――が表している一つひとつの要素を考えあわせようと努力しても、わたしたちは満足のゆく解決策を想像することすらできない」のである[42]。

おわりに

これまで、主に原子力と原子爆弾（ならびに核兵器）に関するヤスパースとアーレントの見解とその真意を簡単に見てきたのであるが、最後に、アンダースを参照しつつ、二人の主たる主張に関する簡単な比較対照を試みる。

まず三人の基本的な相違として、ヤスパースとアンダースが共に原子爆弾と核戦争の脅威を最大限に評価し、＜人類滅亡＞の危機として定式化しているのに対して、基本的にアーレントはそれを一国家や一民族の絶滅に限定していることが挙げられる。とりわけヤスパースにとって、原子爆弾の製造と核戦争の脅威こそが現代の最大かつ喫緊の課題であり、もはや全面核戦争による人類滅亡の危機を回避すること以上に深刻な事柄などあり得ない。ところがアーレントにとって、それはむしろ民族のジェノサイド（大量虐殺）の問題として出現したのである。

次に、発表以来批判の的となってきた＜原爆による死滅か全体主義による自由の死か＞という二者択一について比較する。前述したように、アンダースにとってこのスローガンは、全くレベルの異なる事象（理念）を同列に並べており、議論にすら値しない。それどころか、両者を対置することで、原子爆弾のもつ途方もない脅威が矮小化され、その問題の重大さが見落とされる可能性すら否定できないのである。しかしながら、ヤスパースにとって両者は、本来的には究極の二者択一を

意味するものではなかった。前者を「限界状況」と受け止めることが、むしろ後者の本質へとわれわれを導くことになる。すなわち、前者の問題を真摯に受け止めることで、むしろ初めて後者の問題の重要性に気付くことができるのであり、人間の尊厳や＜生きるに値する生＞を根底から考え直すことが可能となるのである。

最後に、アーレントと対比する。アーレントにとってこの問題は、＜原子爆弾か全体主義か＞という二者択一ではなく、＜原子爆弾と全体主義＞、より正確には＜原子爆弾に伴う全体主義の問題＞として意識された。彼女にとって本来的に重要なのは、人類の滅亡でもなければ、個々の人間の生死自体でもない。より大切なのは、人間の自由な言論や活動を可能にする安定的な世界と固有の伝統や制度の存続であり、＜目的・手段の連鎖＞から解放されるという意味での本来的な自由や自発性であり、そしてそうした自由で多様な＜活動＞の場をいかにして確保するのかという課題なのである。換言すると、一貫して彼女は、経済的利益や国民の生命や国家の安全に占拠されている＜政治＞を、多様で自由な意見が飛び交う、開かれた＜政治＞へと転換する可能性を模索し続けたのである。

注

1）ここでは、森一郎、『核時代のテクノロジー論』（現代書館、2020年）を挙げておく。

2）ヤスパースの技術論に関する論考として、福井一光、『哲学と現代の諸問題』、（北樹出版、2014年）がある。また、最近出版されたものとして、現代思想の重鎮７人に光を当てた『原子力の哲学』、（戸谷洋志、集英社、2020年）がある。

3）本講演は、2021年12月にオンラインで開催された第37回日本ヤスパース協会で行われたもので、タイトルは次の通り。『技術と原子力の問題をめぐって、―ハイデガー、ヤスパース、アーレントを中心に―』。

4）Jaspers, Karl, *Die geistige Situation der Zeit*, Gruyter, 1932, 1979, 1995, S22.　カール・ヤスパース、飯島宗享訳、『現代の精神的状況』、理想社、1971年、1986年、34頁。

5）Vgl. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, Piper, 1949, 1983, S.161.　ヤスパース、重田英世訳、『歴史の起源と目標』、理想社、1964年、229頁参照。

6）ibid., S.159f.　前掲書、227頁。

7）Vgl. ibid., S.130.　前掲書、185頁参照。

8）Vgl. Jaspers, *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen.*, Piper, 1958, 1982, S.258.　ヤスパース、飯島宗享・細尾登訳、『現代の政治意識』（下）、理想社、1966年、1980年、30-31頁参照。

9）Vgl. Arendt, Hannah, *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper, 1960, 2002, S.7ff. S.174. ハンナ・アーレント、森一郎訳、『活動的生』、みすず書房、2015年、1-10頁、176頁参照。1958年に出版された英語版の *The Human Condition*, 志水速雄訳『人間の条件』（ちくま学芸文庫）が一般的だが、ここでは最新のドイツ語版とその翻訳版から引用・参照する。

10）Vgl. ibid., S.175f.　前掲書、177頁参照。

11）S.176f.　前掲書、178-179頁。Vgl. ibid., S.333f. 前掲書、344-345頁参照。

12）Jaspers, ibid., S. 466.　ヤスパース、前掲書下、451頁。

13）Jaspers, ibid., S. 318.　ヤスパース、前掲書下、153頁。

14）Anders, Günther, *Die atomare Drohung*, C. H. Beck, 1981, 2003, 45f.　ギュンター・アンダース、青木隆嘉訳、『核の脅威』、法政大学出版局、2016年、67-69頁。

15）Vgl. Jaspers, ibid., S.268ff. ヤスパース、前掲書下、52-73頁参照。

16）Jaspers, *Von der Wahrheit*, Piper, 1947, 1991, S. 115.

17）Jaspers, *Einführung in die Philosophie*, Piper, 1953, 1983, S.22.　ヤスパース、林田新二訳、『新版　哲学入門』、リベルタス出版、

2020年、26頁。

18) Jaspers, *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen.*, S.283.　ヤスパース、『現代の政治意識』（下）、83頁。

19) Anders, *Die atomare Drohung*, S. 47.　アンダース、『核の脅威』、70頁。

20) Jaspers, ibid., S. 22.　ヤスパース、前掲書上、38頁。

21) ibid.　同。

22) Anders, ibid., S.41.　アンダース、前掲書、62-63頁。

23) ibid., S. 44.　前掲書、66頁。

24) Vgl. ibid., S. 11ff.　前掲書、22-30頁参照。特に、人間が原子爆弾を「製造」する能力と、その途方もない「規模」や「効果」を「想像」する能力との間に横たわる無限の乖離のことを、アンダースは「プロメテウス的落差」と呼んでいる。

25) Vgl. S. 43.　前掲書、65頁参照。

26) Jaspers, *Einführung in die Philosophie*, S. 18.　ヤスパース、『新版　哲学入門』、20頁。

27) Jaspers, *Philosophie Ⅱ, Existenzerhellung*, Piper, 1932, 1994, S. 226.　ヤスパース、草薙正夫、信太正三訳、『実存解明〔哲学Ⅱ〕』、創文社、1981年、258頁。

28) とはいうものの、もちろんヤスパースは、軍事的・政治的・道徳的に核戦争を回避し、世界平和を実現する具体的な方法を提起していないわけではない。ここでは、『現代の政治意識』という題目で邦訳された『原子爆弾と人間の未来』（1958）に先立って行われた、同名のラジオ講演（僅か20頁程）の小冊子を参照されたい。Vgl. Jaspers, *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen.*, Piper, R. Piper & Co, 1957, S.7ff. この冊子において、その具体的な方法が簡潔に述べられている。

29) 山下真、「不死の共同体－ヤスパース『原子爆弾と人間の未来』読解－」、（『倫理学年報』第68集、日本倫理学会編、2019年）、173頁参照。

30) Salamun, Kurt, *Die liberal-aufklärerische Dimension in Jaspers' Denken*, in: Karl Jaspers －Zur Akutualität seines Denkens, R. Piper, 1991, S. 67.

31) 山下真、前掲書、179-180、184-185頁参照。『原子爆弾と人間の未来』における「理性の共同性」と「不死」の意味を解明した上記論文の中で、山下は「＜全体主義支配に屈するか、さもなければ原爆戦争か＞という一般に流布した＜二者択一＞」に対する従来の批判を紹介し、正当にも、それが基本的に的外れであることを指摘している。本論でも繰り返し強調したように、ある世界観や理念や問題設定に対し、相反する両極の立場を明らかにし、問題自体のアポリアを暴露するとともに、両極の緊張のうちで浮動する思考方法こそヤスパースに特有の態度に他ならない。最後に、山下の的確なコメントを引用する。「固定的な諸立場の一面性を露呈させ、自己吟味へと、他者との対話へと向かわせることが目的なのだ。――中略――＜全体主義か原爆戦争か＞という問題設定も、その二項対立の限界を示すためにこそ、多角的に検討されている。論中に登場する特定の立場がヤスパース自身の見解なのではない」（前掲書、185頁）。

32) Vgl. Jaspers, *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen.*, 1958, S. 156ff.　ヤスパース、『現代の政治意識』（上）、294-314頁参照。

33) ibid., S. 324.　前掲書下、164頁。

34) Arendt, edited by Jerome Kohn, *The Promise of Politics.*, Schocken Books, 2005, p.109. アレント、ジェローム・コーン編、高橋勇夫訳、『政治の約束』、筑摩書房、2008年、140頁。

35) ibid., p.159.　前掲書、190頁。

36) ibid., pp.161-162.　前掲書、192-193頁。

37) ibid., pp.128-129.　前掲書、160頁。

38) ibid., p.127.　前掲書、159頁。

39) ibid., p.126.　前掲書、158頁。

40) ibid., p.110.　前掲書、141頁。

41) Cf. Arendt, *Between Past and Future*,

Penguin Books, 1962, 1968, 1993, pp.78-80.
アーレント、引田隆也・斎藤純一訳、『過去と未来の間』、みすず書房、1994年、2005年、104-106頁参照。

42) Arendt, *The Promise of Politics.*, pp.110-111.
アレント、『政治の約束』、142頁。

付記

本論で引用（参照）されている欧文文献は、イタリックで表記し、初版と引用（参照）文献の発行年を併記した。また翻訳に関しては、ほぼ既刊の翻訳文献からそのまま引用させていただいた。

なお本稿は、日本ヤスパース協会第37回大会（2021年12月、オンライン開催）に於いて行われた講演の原稿の一部（ヤスパースとアーレントに関する箇所）を参照し、大幅な加筆修正を施したものである。